五百田家の三兄弟（前編）

陶　易王

序章　蛭田宏次の述懐

私、作家、雑誌編集者、蛭田宏次が五百田家の人々と親密になった経緯は次の通りである。

遠野から突然、友人の伊東靖男が訪ねてくると電話があった。伊東は古い友人で、遠野に関する伝説や民話を収集する事柄を依頼してあった。来月号の原稿を書くのに、どうしてもそれが必要なので是非会いたかった。上野駅で彼に会って資料を受け取ると、

「久しぶりだな、いっぱい飲もう」

と言う。酒好きな彼の要望を断りきれず、車を駅地下の駐車場に預けて近くの料亭に入った。彼と飲むなら車は運転代行人に頼めばいいと、軽く考えたのが間違いだった。

気持ちよく飲んで酔いつぶれた彼を駅前のビジネスホテルに送り届けると、時間はもう　十二時を過ぎていた。駐車場に戻って車に乗り、エンジンを掛けた。窓を開け深呼吸して、まあ大丈夫だろう。捕まるといけないから、なるべく裏道を徐行して帰ろう、と車を走らせた。

しばらく走って、車の中がまだ酒臭いので窓を開けた。これで検問を受ければ、すぐ捕まってしまう。冷たい空気を吸い込んで深呼吸した。くしゃみが頻発しハンドルがぐらついて慌ててブレーキを踏む。危うく電柱にこする所だった。いけない。

気をつけよう。くしゃみの後で水っ洟が出てくる。つるーっと流れた洟を強くかむと、だらだらと流れ出てハンカチにべったりとついたのは真っ赤な血ではないか！

やばい。脱脂綿を探したが見つからない。緊急に用意をしておくべきだ。仕方なくちり紙を揉んで丸め、鼻につめた。事故を起こさぬように注意してゆっくり走らねばならない。鼻血は止まらない。喉にも流れてくる。血の塊が喉におりて、このまま血が止まらないと倒れる。医者を探そう。車のスピードを落としてゆっくり走った。

日ごろ病院など気にしたこともなかったが、いざとなって見つからないものだ。

ずっと先に赤い電球らしきものが見えた。助かった。病院だ。車を止めて玄関のブザーを鳴らす。ドアが少しあいた。

「どうしました?」
「すみません。出血が止まらないのです」
「患者さんはどこですか?　何ヶ月?」
「え?　患者は私です。診てください。こんなに出血している」
「うちは産婦人科です。男性は診ません。他所へ行ってください」
いいながら扉を開けたナースは、ワイシャツの胸に飛び散った真っ赤な血を見て、
「まあ、大変。もう少し先の角を曲がると三階建ての耳鼻科医院があります。そこへ行ってみたら」
仕方がない、車を発進させて角をまがった。そこが耳鼻科医院だった。
ブザーを押すと戸が開いて不二家のペコちゃんみたいな可愛い白衣を着たナースが現れた。
「済みません、出血が止まらなくて困っています」
ワイシャツに飛び散った血を見た。
「まあー、凄い血だわ。すぐこちらに入って」
やれやれ助かったと思った時、ふらふらして気が遠くなり、ドアに寄りかかって倒れた。遠くに声が聞こえる。
「婦長さん、患者さんが倒れました。脈が触れないわ」
「血圧が低いのよ、点滴用意して」
気がつくと右手に血圧計が巻かれ、左手には点滴がポタポタと垂れている。
「血圧９０、脈拍１２０、気がついた様ですね。大丈夫ですか」と優しい声がした。
「すみません、鼻血が止まらなくて。脱脂綿をつめたけど、どうしても止まらないのです」
「今まで鼻血が出た事がありますか?　喉にも流れますか」
耳元でバリトンの声が響いた。静かな落ち着いた男性の声である。眼を開いて見ると、白い手術帽をかぶった人が見えた。ロイド眼鏡をかけて手塚治虫のブラックジャックみたいなドクターだ。
彼は耳鼻科医のトレードマーク、丸い額帯鏡をつけず、小さなライトを額につけている。
「とりあえず診察しよう」
吸引機で鼻の孔をシュッと吸って、鼻に細い内視鏡を挿入する。
「ははー、大分奥にポリープがある。まだじわじわ出血しているから、今日はガーゼで圧迫止血しておきましょう。うちは入院ベッドがない。今晩はこの処置室で止血剤の点滴をしながら休んでください」
親切な言葉に嬉しくなる。
「はい、よろしくお願いします」

「じゃ、あちらに移りましょうか」
婦長さんとペコちゃんに掴まって、ストレッチャーに移り、別室のベッドに寝た。枕元にブザーがある。
「何か御用があったらブザーを押して下さい。点滴は自動で、明朝6時まで継続してセットしてあります。ご心配なくお休みなさい。」
二人が出て行って静かになった。
通りに面しているらしく、時々外を通る車のヘッドライトのビームが窓をはいて行く。
点滴の雫が音も無くゆっくり落ちるのを見ているうちに眠りに沈んだ。
翌朝6時にオルゴールがなる。婦長さんがセットした通りに点滴が終わった。
ペコちゃんが牛乳とトーストを運んで来る。
「有難う、お手数をかけます」
「いいですよ。院長先生と同じ朝食ですから。食事が済んだら診察室に来てくださいね」
9時にドクター、ブラックジャックの診察がある。
「アー、随分奥にポリープがある。いずれ根治手術が必要ですね。今日は電気メスで仮に凝固止血しておきます。もう一度手術するのに他の病院がご希望でしたら御紹介します」
「いいえ、こちらでこのまま先生のご治療をお願いしたいです」
「ご住所は八王子でしたね。一寸遠い。入院できるといいのですが。ではこうしましょう。すぐ近くのビジネスホテルに紹介状を書きます。宿泊料金は安いから、入院費用とさして変わりない。私がアメリカで勤めていたボストンの病院では、ベッドが足りないと患者さんは皆ホテルに泊まって治療に通ってきたものです。その方式でいきましょう」
翌日、ポリープの根治手術を受けた。内視鏡を使いモニターテレビで手術の経過が見える。
「手術中は基礎麻酔で眠くなるから、眠って居る方が楽です。術中ＤＶＤで録画しますから、後でゆっくりご覧下さい」
安心した。手術は一時間位で、眠っている内に終わった。
翌日ペコちゃんナースがきて点滴を外してくれる。
「手術痛かった?」
「いいや、麻酔で眠っていたから全然痛くなかったよ」
婦長さんが来て、
「もう起きてもいいわ。トイレは廊下の奥。今、院長がまいります」
そこに音も無くロイド眼鏡の院長が入ってきた。院長は足音を立てない。
随分静かな人だなと思っていたら、その時初めて気がついた。

院長は車椅子で移動して来る。脚が悪いのかしら？　じっくり診察して彼は言った。

「出血は止まっている。経過はいい。何時退院してもよいが、病理組織検査の結果は2週間後です。まあ肉眼的には、癌でないと思うけど」

「先日お願いした様に、もしお邪魔でなければ、もう少し面倒を見て下さい。処置に通院します。私はどうせ独り者ですから、ホテルで原稿でも書いていましょう」

ブラックジャックはロイド眼鏡の奥から私をじっと見て、にやりと笑った。

「ご職業は物書きと仰いましたね。この病院に興味を持ちましたか？　いいですよ。資料は提供致します。書きたい事を書いてください。何でもお話しましょう」

長男、晋吉の章……院長の語り

五百田家は代々信州の湯田中で開業医をしていた。祖父五百田卯衛門は典型的な町医者で内科でも外科でも産婦人科でも、総合的にすべてこなし医療費は有る時払い。

お百姓は金が無いと、大根や青菜など農作物を持ってきた。祖父は極めて、スタンダードな赤髭精神の持ち主だった。

庭に土蔵がある。大掃除の時に中で和紙に墨で書かれた診療日誌を見つけた。

埃まみれだが和綴じの診療日誌は几帳面に書かれ、当時の医療状況を的確に物語って興味深い。冬の信州は雪が深く、往診は馬や駕籠で峠まで出かけている。

処方を見ると、風邪にアスピリン、葛根湯，青柳湯、等、漢方薬が多く、ヒステリーに重曹、ジアスターゼ等、抗生物質や精神安定剤の無かった時代としては、平凡だがまともな治療である。

後に東京に移ってから医院の庭はそのままに、柿、モモ、栗、杏など実のなる樹が繁り、皆、そのまま残してある。祖母の話によると、医療費を現金で払えない人は、米、野菜等を持参して、又実のなる樹を庭に植えて行った。庭は患者が植えた杏の樹が増えて、林になっている。それが杏林といわれて、名医の代名詞になったと言われる。

父親の貫太郎は若い頃、結核を患い、冬の信州の寒さは肺に悪いから東京に移住し、病院を続けた。体力がないから、内科、外科は避け、比較的身体に楽な耳鼻科を選んだ。

祖母の遺志で息子三人は医師の途を選んだ。

長男の晋吉が医大に入った頃に、太平洋戦争が始まる。理系の学生は召集を免除されると楽観していたが、戦局が厳しくなると兵員が足りなくなって、在郷軍人から、卒業間際の医学生まで狩り出され晋吉にも赤紙が来た。

晋吉は親戚が西南戦争で用いたと言う古い軍刀を下げて出

征した。近代戦に、軍刀が何の役に立つのだろう。行く先はきっと南方に違いないと観念していたが、船は北上し大連港についた。

軍の機密だから、どこの戦線に行くのか全く告げられず、窓にカーテンをかけられた列車に何日も揺られ、ソ満国境に近いチチハルに到着した。此処から更にトラックで半日、寂しい農村についた。此処は劉家屯と言う所謂満蒙開拓団の村で、此処の守備隊になるらしい。隊長は三十五歳の峰中尉、関東軍直属の実力者だと聞いた。

守備隊員は約四十人、顔ぶれを見ると中年過ぎの老兵ばかり、胡麻塩頭の老人もいる。

こんな編成で戦争が出来るのか、甚だ頼りない。隊員は一応三八式銃を持っている。

召集以来、軍刀を下げた晋吉は将校だから、拳銃と弾丸十発が支給された。

晋吉は拳銃を撃った事がない。これは陸軍南部式拳銃と言って撃つ時の反動が強く、両手でしっかりと把持せねばならない。こんな拳銃で戦闘ができるのか、それとも自決する時の為なのか。

隊長は皆を集めて訓示する。

「これは三八式と言って帝国陸軍で最も性能がいい銃だ。畏くも、気をつけ！　陛下の菊の御紋章がついている。何？　使用法が判らん？　誰か知っている奴がおるだろう。自分は忙しい。教えている暇はない。互いに教えあって敵が来るまでに撃てるよう練習、熟達しておけ。弾丸は五十発支給する。開拓団といっても、何も無い荒れ地を開拓するわけではない。満人の農地を取り上げて彼らを追い払い、そこに日本人が入植したのだ。だから満人の農民は我々を恨み、憎んでいる。戦局が不利になれば、必ず襲ってくる。敵が襲ってきたら、銃で撃退するのだ。銃の使い方は各自で研究し、帝国軍人に恥じぬよう行動せよ」

隊長が居なくなると、皆ぶつぶつ言い出した。老兵たちは銃の扱い方を知らないという。

下士官はいるが、隊長ではない。晋吉も支給された拳銃は使ったことが無く不安だ。

まあ、実際に戦争になれば何とかなるさ。たまに上空を飛行機が飛ぶ。

どこで戦争をしているのか、判らないが全く静かである。着任して一週間目に、血相を変えた隊長が現れた。口角が引きつっている。

「状況が変わった。自分は関東軍本部の連絡に行く。敵が来たら貴様らは此処を死守せよ」と叫んで一台しかない自動車に飛び乗ると、砂塵を吹き上げて走り去った。

二日後に自動小銃を構えたソ連兵が通訳を連れて、どやどやと乱入して来た。
「日本軍は無条件降伏した。お前たちは捕虜だ。武装解除する。武器を前に出せ。抵抗すれば銃殺する」
峰隊長がいち早く逃げたわけがやっと判った。流石、関東軍である。
「戦争は終わったぞ！　よかったね。国に帰れる！」
皆、がやがや喋りだした。
武装解除された日本人捕虜を満載して、大型トラックは高粱畑の狭い途をがたがた走る。
「何処へ行くのかな？」
「北へ向かっているぜ」
「シベリアかも知れない」
「死ぬまで重労働だろうか」
「国境に着く前に逃げようぜ」
畑の道で車の左前輪が穴に落ち、大きく傾いてトラックが止まった。
「今だ。逃げろ！」
皆、車からばらばら飛び降りて高粱畑の中に逃げ込んだ。
「クダァ?！　何処へ行く!?　ストイ！　停まれ！」
と喚くロシア語が聞こえ、続いてパンパンと銃声が追いかけて来た。
晋吉は、左足に激痛が走ったが、かまわず高粱を掻き分け、突っ走って逃げた。暫く走って何も聞こえなくなって倒れた。脚に血が流れている。手ぬぐいで縛った。畑の隅の水溜りで水を飲む。さてこれからどうするか。鉄道の線路を見つけたそれに沿って、南へ向かって歩いてゆこう。汽車に乗れないから線路に沿って歩こう。地図も時計も、ソ連兵に強奪されて何も無い。時間も方角も判らない。
歩き疲れてふと前方を見ると、小さな小屋があった、近づいてそっと扉を押して入る。
誰も居ない。農機具を仕舞っておく所らしい。隅の藁の上に汚れた農夫の作業服が脱ぎ捨ててあった。これはいい。軍服を脱ぎ捨て、着替える。汚れて凄く臭い。
仕方ない。我慢しよう。綿入れのベストもあったので、それも着る。これなら満州の中国農民に見えるだろう。安心して部屋の隅に敷いてあった藁の上にごろりと寝転んだ。
眠くなっていつの間にかぐっすり眠り込んでしまった。
どの位眠ったか。
突如、悪魔の咆哮で眼が覚めた。
「ウホオー、ウホオー、ヒーヒー」
少し休んで又、繰り返す。
扉を少しあけて覗いて見ると、夜が明けて辺りは薄明るくなってきている。百メートル位、先の木の下に一頭のロバが

繋がれていた。ウホー、ウオーと言うのはロバの啼き声だった。晋吉は今まで驢馬を見た事はあるが、啼き声を聞くのは始めてだ。

哀愁を帯びたその声を聞いていると、自分と同じ気持ちではないか、と驢馬に同情した。

月が傾いて辺りが薄明るくなってくる。鶏が鳴いた。驢馬の横に飼い葉桶があって水で溶いた糠(ふすま)が入っている。これでも腹の足しになるかな、と掬って口に入れてみた。

とても食べられるものではない。諦めた。住民が出てくるとまずい。早く立ち去ろう。高粱畑の道を南に向かって歩き出した。時計も地図も磁石もソ連兵に強奪された。

方向がわからないから太陽を目標にして歩く。だがいくら歩いても集落は見えず、誰にも会わない。満州は広いと聞いたがこんなに広いとは思わなかった。

うんざりして座り込みたくなった。ふと見ると遠くに柳の並木が見え、前にクリークが流れて柳の根元に人が座っている。横に竹で編んだ籠がある。婆さんが籠に被せた布をめくって中から白い饅頭らしい物を出して食べ始めた。見ていると、空腹の晋吉はもう我慢できず、ザブザブ川に入って対岸に渡った。水深は膝までで浅い。

婆さんは、突然、川を渡ってきた男が目の前に現れたので驚いて饅頭を手にあんぐりと口を開けた。晋吉は中国語が喋れない。日本人と判れば捕まってしまう。

唾のふりをしよう。仏を拝むように跪いた。口を開けて饅頭を指差し食べる真似をして腹を押さえると、婆さんは笑い出して「餓？　空腹かい？」と言って、籠から饅頭を一つ出してくれた。彼は両手で押し頂き、叩頭してから、かぶりついた。

中に何も入っていない玉蜀黍の白い饅頭だが実に旨かった。食べる様子を見て婆さんは、呆れ、もう一つ、出してくれた。饅頭を二つ瞬く間に食べるともう一度叩頭した。

婆さんが、

「お前は何処から来た？　何故空腹か？」

と質問した。

晋吉は慌てて、又、聾唖(おし)の真似をして手をふって誤魔化し、そこを離れた。

「危ない。危ない。日本兵とばれないように注意しなくては。あくまで痴呆を装って」

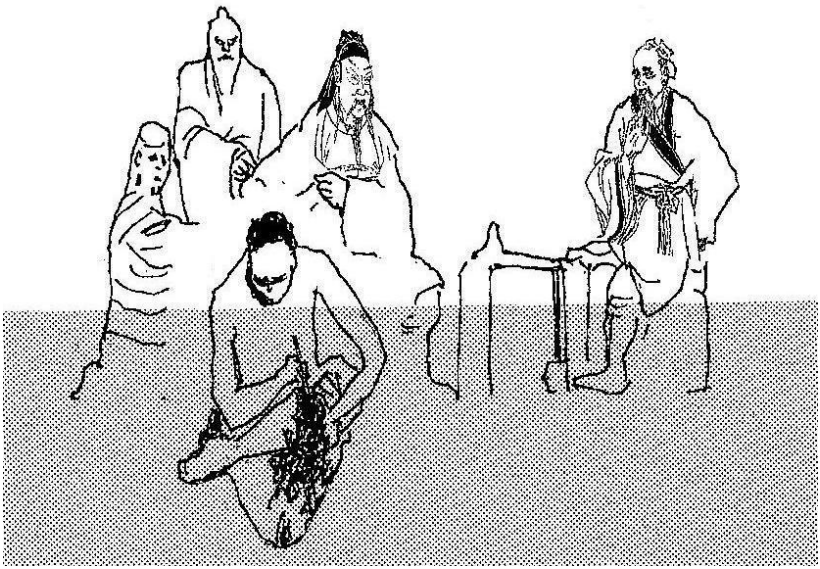
近くの人家の集落を避けてひたすら南に向かって歩く。喉が渇くと水たまりや、用水の水を飲んだ。空腹になると、畑の作物や玉蜀黍をもいで生のまま食った。

疲れて記憶が減退し、意識が朦朧としてきた。惰性で機械的に脚を動かしている。

ひとっ子一人会わない。地平線すら見えない。世界の果て

まで歩くのか。
晋吉は汽笛が鳴るのを聞いたような気がした。砂漠で迷うと蜃気楼が見えるという。
晋吉は汽車が走っている幻影を見た。駆け寄って、飛び乗ろうとしたが、そこには何もなく、ばったり前に倒れた。そして意識を失った。
気がつくと晋吉は誰かに抱えられて動いてゆく。小屋の中に入った気配で、藁の上にどさっと投げ出された。目の前に銃を構えた二人の男が立っている。背の高い金髪の白人と、がっちりした中背のアジア系の男である。
「クトー、ブイ？　お前は誰だ？　ヤポンスキー？」
手を振って判らぬふりをする。アジア系が
「朝鮮人でも、中国人でもないな。お前は日本人だろう」
と言う。訛りの強い日本語だ。晋吉は少し考えて、どうせばれているなら、正直に言ったほうがいい。
「私は五百田晋吉、日本兵だ。日本が降伏して、ソ満国境で捕虜になった。シベリアに送られる途中、脱走して、それから高粱畑の道を歩いてここまで到達したのだ」
「チチハルからよく歩いてきたな！　此処はもうハルピンに近い。何日食ってないのか？　空腹だろう。こちらに入って、食事しなさい」
隣の部屋に丸テーブルがあって、上にナンと豆乳、油条が用意してあった。
「さあ、食べなさい。我々は最初、君がスパイじゃないかと疑っていた。見ていると、もう、その疑いも晴れた。君が何時か故郷に帰れるよう計らってあげよう」
「私は国境守備隊に組み込まれていたけど、一度も戦闘しないうちに日本が降伏した。脱走した時に、ロシア兵から銃で脚を撃たれた。まだ時々痛む」
白人はユダヤ系白系ロシア人で名前はウラジミール・ステパノフと言う。満州に白系ロシア人の共和国を建設する為の工作をしているという。アジア系の男は、朴憲英と言う。朝鮮人で日本の植民地支配から脱却、独立運動をしていた。
晋吉は知らなかった。彼の話では、満州には漢民族、朝鮮族、蒙古族、満州族、白系ロシア人等色々な民族が沢山居る。日本は満州を侵略し、旧満州、清朝の廃帝を傀儡皇帝にして満州国を建設した。日本が降伏してすべて終わり満州人民は解放された。
朴憲英は色々講釈し、教えてくれる。晋吉は自分が全く無知だった事を覚った。
話をしているうちに晋吉は脚が痛んで熱が出てきた。見ると赤く腫れあがっている。撃たれた自動小銃の弾丸が入っているかも知れない。ステパノフと朴憲英が相談して、
「それじゃ俺たちのアジトに連れてゆこう。そこまで遠い

が我慢して、これを飲め」
と、薬を呉れた。飲むと眠くなり、小型トラックに乗せられ、一日走って公主嶺についた。
大きな農場である。医務室があって、昔、八路軍で従軍看護婦をしていた玲と言う娘が診てくれた。これは切開手術をせねばならないと言う。晋吉も肯いた。
「私は医者だ。自分で手術する。」
玲が驚くと、棚にある器械を渡して消毒を頼んだ。
煮沸消毒した器械がベッドの横に並べられた。晋吉はゴムのバンドで、膝の下をギリギリと強く巻き、暫くして痛覚が無くなったのを確かめて、ヨードチンキを塗り赤く腫れ上がった部分に約三センチ皮膚切開を加えた。どろりとした膿と血液が、どっと流れた。見物していた連中は、一瞬顔色を変え、はっと息を呑んだが、倒れなかった。
玲が呉れる湯沸しの水でジャージャー傷を洗うと、脛骨に食い込んだ小銃の弾丸が銀色に光っていた。玲の顔を見るとうなずいたので、ペアンで挟み力いっぱい抜き取った。
骨髄からは思ったより出血はなかった。ドレインがないのでゴム手袋の指を切って、挿入し、ペンローズドレインにした。止血帯をはずすと血が流れ、痛みが急に襲ってきたのでガーゼで圧迫し包帯をきつく巻いた。晋吉の痛みの表情を見て、玲が「痛?」と訊く。
頷くと茶碗に一杯の薬湯を呉れた。
「これは麻沸湯!」
と言う。飲むとじきに眠くなった。実によく効く。昔、名医、華陀が、関羽の手術に用いたと言う処方らしい。
手術の効果はあった。翌朝、痛みも腫れも、嘘の様に退けた。
二日後、ステパノフと朴憲英が現れて
「弾丸が骨に刺さったまま、よく広野をここまで歩いてきたものだ」
と感心した。
熱も腫れも引いたが、とてもまだ歩けない。朴憲英が
「当分、此の聶農場で厄介になるといい」
と薦めてくれたので、その様に決めた。
ここは大農場である。沢山の人が出入りする。主人の聶允氏に挨拶に行く。
老公は長い白い髯を撫でながら、
「歓迎! 遠い所をよく来られた。自分で手術したそうだな。三国志の名将関羽と同じだ。貴方は侵略戦争の尖兵として満州に来たが、一発の弾丸も撃っていない。寧ろロシア兵の弾丸で怪我をした被害者だ。君は悪くない」
と慰めたので晋吉は恐縮した。



「当分、ここに滞在して養生し、玲に中国語等色々教わるといい。彼女は優秀なナースだ」

晋吉は叩頭して引き下がった。

農場の診療所には患者が沢山来る。腹痛、下痢、発熱の他に、銃傷や刀で切られた傷も来る。近くでまだ戦闘が行われているのだろうか。玲に聞くと。

「蒋介石の残党がまだ各地に居るので、人民解放軍が掃蕩作戦をやっているのでしょう」

晋吉は戦争から脱却できて本当に良かったと思った。

聶家は大家族である。老公には子供が十人居るが、他に従兄弟が何人も居て、旧正月や清明節は沢山の家族が集まって食事をする。彼らは皆明るく親切に接して、晋吉に日本の敗残兵の肩身の狭い思いをさせない。彼らの仲間に入って新しい事を学んで行こうと晋吉は心に決めた。

診療を始めると、忙しくなった。玲は助手でなく、教師であった。

臨床実地について晋吉とは比較できない多くの経験を持っていて、すべて彼女に学習する。

香港に居る次男の栄や、ニューヨークに居る四男の密もアメリカの最新医学雑誌を持ってきてくれたので、それを熱心に勉強して、新しい医術を覚えて実用に用いた。

大陸各地で蒋介石軍が敗退し、台湾に逃亡するかと言う頃

に、七男の皓が現れた。
彼は米軍の軍属で横浜から大連に帰って来た。
「日本は空襲で焼け野原になったが、もう随分復興してきた。そろそろ家族に消息を知らせてみたらどうかね」
といった。
晋吉は心のそこに埋もれていた望郷の念が掻き立てられた。もう何年も消息不明だったから、きっと戦死したろうと諦めているに違いない。何と連絡すればよいのか。
八男の豪が東京に行ったついでに、町田の実家を訪ね、晋吉が健在だと連絡してくれる。

晋吉が帰宅した。玄関に入ると喜びの声と、悲鳴が交錯して渦巻いた。
父、貫太郎は健在だったが、母染野は昨年他界していた。晋吉は母の墓と、自分の墓の前に額ずき線香を立てて冥福を祈った。
学歴が無いので、晋吉は大病院に入局できない。父貫太郎の友人が院長の、病院に勤める。晋吉は主に循環器病を専攻したいと希望した。アメリカの最新知識を活用し心筋梗塞のカテーテル療法を試験的に始め、良い成績を収めたので患者が大いに集まってきた。
すべて順調なのでそろそろ玲を呼んで、結婚してもいいと考えて家族に話しをした。家族は皆賛成してくれたので、晋吉は幸せいっぱいの気分に満たされた。

近頃運動不足で肥満気味の晋吉は、痩せるため、毎週、日曜日に近くの運動場で草サッカーのチームに参加してトレーニングする。
ある日、運動場で走っていると、息切れして胸が苦しく意識が朦朧となった。
ふと高粱畑で走っている幻覚が起きた。その時、小学生の運動会のスタートのピストルが鳴った。晋吉は倒れた。左足に痛みを感じた。友人が抱き起こすと「ロシア兵にやられた」と叫んだ。すぐ病院に運ばれたが、もう心肺停止で、呼吸をしていない。
診断は心室瘤破裂による死亡であった。

（後編に続く）

冬季号は1月下旬に発行予定です

《医家写真展と邦楽祭》特集号

◇原稿締め切り　医家随想などは12月26日、
俳句・短歌・川柳は1月8日。